

原 著

前象徴遊び期から象徴遊び期の精神遅滞児の
母親の遊び場面における働きかけの分析

腰 川 一 恵*・池 田 由紀江**

本研究の目的は、前象徴遊び期から象徴遊び期にかけての精神遅滞児の母親の遊びへの働きかけを分析することにある。対象児は8名の精神遅滞児であり、すべての対象児とも精神年齢や言語表出は同じまたは近いレベルのものである。「料理—食べる」テーマにそった道具が設定された条件下で、母親と対象児1名の自由遊びを観察した。この遊び場面が5分間ビデオテープに録画され、分析された。その結果、母親は象徴遊びが未発達な子どもに対して象徴的な働きかけをおこなっており、精神遅滞児の母親の発話特徴は象徴遊びの情報を与えたり操作をおこなっていた。また、母親の働きかける遊びのレベルは子どものよりも高いものであり、遊びの内容は子どもの日常生活でおこなっているものであった。

キー・ワード：精神遅滞児 遊び 母親の働きかけ

I. 問題と目的

乳幼児期の特徴的な遊びといわれる象徴遊びは、子ども自身の認知的な能力を表わすことや、言語発達との関連があるといわれている。そこで、精神遅滞児の象徴遊びは、ひとり遊びでの研究や母親の積極的な参加の無い遊びの研究が行われてきた。その結果、精神遅滞児の象徴遊びは、健常児の生活年齢と精神年齢が同じ時、健常児と同じ遊びの発達の道筋をたどる (Hill and MuCune-Nicolich, 1981¹⁰⁾; 笹生, 1981; Shimada, 1981¹⁹⁾; 細川・池田, 1988⁷⁾; Shimada, 1988²⁰⁾), 健常児に比べて遊び行動のレパトリーレパートリーの少なさや遊びのエピソードを短く繰り返す傾向がある (Krakow and Kopp, 1982¹²⁾) という報告がなされている。

無藤・外山 (1991¹⁵⁾) は、子どもは大人との遊びのやりとりからおもちゃについての特性を学ぶと同時に、おもちゃが使われる文脈がどうい

うものであるかについて学んでいくと報告した。また、親を含めた社会的環境の側面が乳幼児期の遊びの質に影響を及ぼしているという報告 (Fiese, 1990¹¹⁾) もなされている。精神遅滞児の象徴遊びの発達促進を考えた場合、乳幼児期といった早期からの養育者の働きかけ、特に日常接する機会の多い母親の働きかけが遊びの発達の大きな要因となっていると思われる。そこで、象徴遊びが出現していない時期から象徴遊びが出現した時期にある精神遅滞児の母親の働きかけを分析し、精神遅滞児の遊びへの母親の働きかけの特徴を明らかにする必要があると思われる。

母親の言語の働きかけでは、健常児の母親は子どもを取り巻く様々な対象に対して、しぐさや言葉によって象徴性を表現し、遊びに関する知識を子どもに伝えている。蓮見・秦野・栗山・星・瀬戸・前川 (1993⁹⁾) は、象徴機能が未発達の段階にある子どもに対して、すべての母親が事物表象を行っているとして報告した。また、星・瀬戸・蓮見・秦野・栗山・前川 (1993⁹⁾) による

*心身障害学研究科

**心身障害学系

と、12ヶ月の子どもと母親の遊び場面では、母親の言語や行動は事物操作、事物表象、文化・社会的知識に分類することが可能であり、母親は子どもに対して命名といった事物に関する情報や遊びの文脈に必要な社会習慣ルールの情報を多く与えていることが示された(秦野・栗山・星・瀬戸・蓮見・前川, 1993⁹⁾)。

遊び文脈(スクリプト)にかかわる母親の働きかけに関する研究も行われている。Seidman, Nelson, and Gruendel (1986¹⁸⁾)は、母親と子どもが遊びのスクリプトを共有することにより、象徴遊びの展開が促進されたことを報告した。また、吉水(1989²³⁾)は、子どもがスクリプトを獲得できていない段階では、母親が遊びの主演となって行動し、子どものスクリプトの形成の鍵となる役割を果たしていることを示唆した。

精神遅滞児と母親の遊び場面での母親の働きかけは、健常児に比べて指示的である(Cunningham, Reuler, Blackwell, and Deck, 1981; 細川・橋本・池田, 1989⁸⁾)、要求が多い(Buim, Rynders, and Turnure, 1974¹⁾; Marshall, Hegenes, and Goldstein, 1973¹³⁾)、遊びを主導することが多い(細川・橋本・池田, 1989⁸⁾)といわれている。象徴遊びが出現する前の時期の精神遅滞児に対して、母親のこのような働きかけの特徴があらわれているのかを検討すること、また、母親の遊びへの働きかけが子どもの生活年齢、精神年齢、遊びレベルの要因の影響をうけているかを検討することは、今後の母親に対しての子どもの遊びへのかかわりの指導を考える上で有効な情報になると思われる。

そこで、本研究では①精神遅滞児の母親は、子どもの象徴遊びが未発達でも言語や行動で象徴的な働きかけを行っているか、②精神遅滞児の母親は象徴遊びに関する情報をあたえているか、③母親の働きかける象徴遊びの程度は、子どもが行える象徴遊びの程度より高度であるか、④母親は象徴遊びの内容として、遊びのテーマにあった一連の順序を持った遊びを展開するか、子どもが日常行ったり、子どもができるこ

Table 1 対象児の概要

対象児	CA	MA	言語表出
A	0:9	0:6	指示的発声
B	1:4	0:8	指示的発声
C	1:5	1:2	指示的発声
D	1:6	0:10	指示的発声
E	2:5	1:5	指示的発声
F	3:0	1:0	指示的発声
G	3:1	1:3	一語発話
H	3:5	1:10	指示的発声

とに即した遊びを行うか、という点を検討する。以上の点から、前象徴遊び期(3ヶ月～9ヶ月)から象徴遊び期(13ヶ月～21ヶ月)にかけての精神遅滞児に対する母親の遊びへの働きかけを明らかにするとともに、母親の働きかけには子どものどのような要因が関与しているのかを検討する。

II. 方法

1. 対象者

CA 8ヶ月から3歳5ヶ月までの精神遅滞児とその母親各8名を対象とした。対象児の生活年齢(以下CAとする)、MCC ベビーテストまたは全訂版田中・ビネーテストによる精神年齢(以下MAとする)、表出言語レベルをTable 1に示した。G児の言語表出は一語発話であり語彙は3語あるが、遊び場面での表出言語は発声のみであり、遊びの中で機能的に言語を使用できる段階ではない。

2. 手続き

筑波大学心身障害学系のプレイルームにおいて、母子1組に対して5分間の自由遊び場を設定し、この場面がVTR録画された。母親に対しては、日常の家庭場面のように接するよう指示を行った。また、遊具はままごとセット(皿、カップ、スプーン、フォーク、塩コショウ入れ、砂糖入れ、レンジ、鍋、フライパン、やかん、まな板、包丁、野菜やハンバーグの模型)と人形を自由に使うよう求めた。

3. 分析方法

Table 2 象徴遊びのレベル

象徴遊びのレベル	定 義
物の操作	玩具をたたいたり、投げたり、ひっぱる等、単に物を操作するのみの行動
象徴遊び I	子どもが日常的に参加してきたよく慣れた活動（例、食べる、飲む）の単一のふり行為
象徴遊び II	2つの行為の連続や2つの道具をもちいる行為（例、ポットからカップに注ぐ、スプーンで皿からすくって食べる等）
象徴遊び III	2つより長い行為の連続や2つ以上の道具を用いてより日常経験を詳細に表象する
象徴遊び IV	「料理—食べる」スクリプトを順番に展開すること

Table 3 母親の発語の機能の分析カテゴリー

カテゴリー	定 義
行動要求	「ゆっくりね」「そっとね」など、具体的な行動を求める
行動提案	「～しよう」「～したら」「どうぞ～」などの行動提案
説明要求	「だれ?」「どうしたの?」「なに?」など、命名や説明を求める
明確化要求	「ん?」「えっ?」など、先行する発話や行動の明確化を求める
注意喚起	「わかる?」「ほら」「気をつけて」などの注意喚起
禁止・拒否	「いけません」「やめなさい」「ちがうでしょう」「いやだ」などの禁止や拒否
教示・説明	教示や説明、報告、命名
内的表出	自分の感情の表出、相手に対する評価など
受容・了解	「そうね」「そうしよう」などの受容、了解やなだめ
その他	上記のいずれにも該当しないもの、意味不明のもの

VTR録画資料から、5分間に生じた母子の動作、発話、発声をすべて文字化し、以下の分析を行った。

1) 子どもの象徴遊びレベル

子どもがどのような遊びをおこなっているか、また象徴遊びの場合、遊びの統合化がおこなわれているかの分析をおこなった。Westby

(1991²²⁾)を参考に、子どもの象徴遊びレベルを①物の操作②象徴遊び I ③象徴遊び II ④象徴遊び III ⑤象徴遊び IVに分類し、Table 2にレベルの定義を示した。子どもの象徴遊びレベルをTable 2のレベルで分類し、それぞれの項目の出現頻度を求めた。

2) 母親の象徴遊び提示レベル

Table 4 母親の発話の内容の分析カテゴリー

カテゴリー	定	義
文化・概念的知識	数、色、形や物の特性や属性の表現	
感覚・情緒的知識	かわいい、おいしい等の感情表現	
命名や擬声語、擬態語	名称を付与や、動作の擬声語や擬態語	
社会習慣ルール	あいさつやありがとう等の慣用句としてつか われる表現	
やりとりパターン	提案したり、子どもの気持ちの代弁	
経験・既有知識との関連づけ	経験や既有知識との関連づけの表現	

母親がどのような遊びをおこなっているか、また象徴遊びの場合、遊びを統合化しているかの分析をおこなった。母親の象徴遊び提示レベルを子ども同様 Table 2 のレベルで分類し、それぞれの項目の出現頻度を求めた。

3) 母親の発話の機能の分析

母親の言語カテゴリーを Dore (1978³⁾) および武井・萩野・大浜・斎藤 (1984²¹⁾) を参考に、Table 3 のように定義し分類した。それぞれの母親の発話総数を 100 とした場合の各項目の割合を求めた。

4) 母親の発話の内容の分析

母親が文化・社会的な情報として、どのような内容をどれくらい子どもに与えているのかを明らかにするために、秦野ら (1993⁹⁾) を参考に母親の発話を Table 4 のカテゴリーに分類した。それぞれの母親の発話総数を 100 とした場合の各項目の割合を求めた。

5) 母親の「料理—食べる」スクリプトのスロット構成

「料理—食べる」という遊びのテーマが現実に近いおもちゃにより設定されてしまっている場合、母親は子どもに時系列・因果関係の正しい遊びを示すかについての分析をおこなった。Nelson and Gruendel (1981¹⁶⁾)、吉水 (1989²³⁾)、加島・池田 (1994¹¹⁾) を参考にし、本研究の「料理—食べる」スクリプトの基本となる時系列・因果関係の正しい行動や言語の連鎖 (核スロット) を Table 5 のように設定した。また、Table 5 以外の行動や言語 (例: 塩やこしょうをかける、いただきます、ごちそうさまを言う等) を

Table 5 「料理—食べる」スクリプトの核スロット

核スロット
1. 料理開始宣言をする。
2. コンロにフライパンまたはやかんをのせる。
3. コンロに火をつける。
4. 調理する。
5. 皿に盛る、コップに注ぐ。
6. 料理終了宣言をする。
7. 料理の中身を確認する。
8. 食べる人を決定する。
9. 食べる、飲む。
10. 「おいしいね」という。

細部スロットとし、「あついね」「しょっぱい」など気持ちを表す言語を内的状態スロットとし、それぞれの項目の出現頻度を求めた。

6) 母親の「料理—食べる」スクリプトの核スロット実行頻度

母親は、「料理—食べる」スクリプトの基本となる行動や言語の系列のうち、どの部分を実際の遊びに示しているのであろうか。本研究の Table 5 の「料理—食べる」スクリプトの核スロットの各項目について、母親の実行頻度を求めた。

7) 信頼性

対象母子 1 組について観察者 2 名の分類の一致率を求めた。その結果、一致率は象徴遊びレベル 95.0%、母親の発話機能 81.4%、母親の発話内容 90.7%、母親のスクリプトのスロット構成 93.3%、母親の核スロット実行 95.1%であっ

Table 6 子どもの象徴遊びレベルの出現頻度

	物の操作	象徴遊び I	象徴遊び II	象徴遊び III	象徴遊び IV
A	8	0	0	0	0
B	28	0	0	0	0
C	18	10	0	0	0
D	23	7	0	0	0
E	6	1	3	0	0
F	13	1	1	0	0
G	2	0	9	0	0
H	6	1	6	4	0

Table 7 母親の象徴遊び提示レベルの出現頻度

	物の操作	象徴遊び I	象徴遊び II	象徴遊び III	象徴遊び IV
A	6	0	3	2	0
B	4	5	4	0	0
C	0	0	4	6	0
D	2	6	4	1	0
E	0	1	6	3	0
F	4	0	5	1	0
G	2	2	7	1	0
H	0	1	3	2	0

た。

III. 結果

1. 子どもの象徴遊びレベル

子どもの象徴遊びレベルを Table 6 に示した。A 児、B 児は物の操作のみ、C 児、D 児は物の操作と象徴遊び I が出現している。E 児、F 児は物の操作、象徴遊び I、象徴遊び II であり、G 児は物の操作と象徴遊び II、H 児は物の操作、象徴遊び I、象徴遊び II、象徴遊び III までが出現している。

2. 母親の象徴遊び提示レベル

母親の象徴遊び提示レベルを Table 7 に示した。B 児以外の母親は物の操作、象徴遊び I、II、III を提示している。B 児の母親は物の操作、象徴遊び I、象徴遊び II を提示している。すべての母親とも象徴遊び IV は出現しなかった。

3. 母親の発話の機能の分析

母親の発話の機能カテゴリーの割合を Table

8 に示した。健常児の母親の場合、行動要求は子どもの前象徴遊び期 (3ヶ月～9ヶ月) にも 10% 程度みられ、象徴遊び獲得期 (13ヶ月～21ヶ月) に増加するが、象徴遊び展開期 (24ヶ月以上) になると 10% 以下に減少している (武井ら, 1983²¹⁾)。A 児、B 児、C 児、D 児、E 児、H 児の母親の行動要求の割合は 5% 以下であり、健常児のどの時期よりも少なくなっている。行動提案は、健常児の母親の場合、3ヶ月から 36ヶ月の間を通して 6% 以下であるが、D 児、G 児をのぞいた子どもの母親は 10% 以上であり、なかでも E 児、H 児は高い割合であった。説明要求は、健常児の母親の場合、前象徴期には 10% 以下であるが、象徴遊び獲得期から増加しはじめ、象徴遊び展開期には 30% に達している。A 児、B 児といった前象徴遊び期にある子どもへも母親は説明要求を行い、子どもの行動の意味を確かめようとしている。明確化要求では、健常児の場合、子どもからの母親への働きかけが多くな

Table 8 母親の発話の機能カテゴリーの割合

	行動要求	行動提案	説明要求	明確化要求	注意喚起	禁止・拒否	教示・説明	内的表出	受容・了解	その他
A	0.0	10.4	14.6	12.5	4.2	0.0	32.3	21.8	1.3	1.3
B	2.0	12.2	10.2	10.2	10.2	0.0	32.8	20.4	2.0	0.0
C	4.6	16.9	4.6	7.7	3.1	3.1	39.0	21.0	0.0	0.0
D	0.0	6.9	0.0	3.8	3.8	0.0	37.3	41.3	6.9	0.0
E	1.5	43.2	4.5	1.5	0.0	0.0	28.4	19.4	1.5	0.0
F	10.7	25.0	0.0	0.0	17.8	3.6	28.6	14.3	0.0	0.0
G	16.3	8.2	8.2	8.2	4.1	4.1	21.4	29.5	0.0	0.0
H	0.0	36.4	10.9	1.8	1.8	1.8	7.3	40.0	0.0	0.0

単位 (%)

Table 9 母親の発話の内容カテゴリーの割合

	文化・概念的知識	感覚・情緒的知識	命名	社会習慣ルール	やりとり	経験・知識
A	2.9	11.8	50.0	5.9	29.4	0.0
B	0.0	26.8	36.6	4.9	26.8	4.9
C	0.0	8.3	43.4	20.0	28.3	0.0
D	0.0	46.4	42.9	3.9	7.1	0.0
E	5.6	26.8	21.1	11.3	33.8	1.4
F	3.1	6.3	21.9	15.6	53.1	0.0
G	0.0	25.6	41.8	18.6	14.0	0.0
H	1.7	25.4	11.9	30.5	30.5	0.0

単位 (%)

る象徴遊び展開期に僅かに増加している。本研究では前象徴遊び期である A 児、B 児に 10% 以上みられていた。注意喚起は、健常児の場合、年齢が低いほうが割合が高く、年齢が高くなるに従い減少している。本研究では、B 児、F 児が高い割合になっている。禁止・拒否は健常児の母親、本研究の母親とも低い割合であった。内的表出は、前象徴遊び期から象徴遊び確立期でみられ、健常児が言語を十分に遊びに使用出来ていない段階では 15% 程度の割合であるが、象徴遊びが確立し、発展していき、言語を遊びに使用できるようになると、低い割合になる。前象徴遊び期にある A 児、B 児もふくめたすべての子どもの母親は高い割合で内的表出を行っている。受容・了解は、健常児が母親に働きかけを多く行えるようになる象徴遊び確立期以降増加しているが、本研究のすべての子どもの母親は低い割合であった。

4. 母親の発話の内容の分析

母親の発話の内容カテゴリーの割合を Table 9 に示した。12ヶ月前後の健常児の母親では、命名および社会習慣ルールを多く与えており、文化・概念的知識や感覚・情緒的知識は 15% 前後であった (秦野ら, 1993⁹⁾)。文化・概念的知識では、A 児をのぞいてより生活年齢が高く、象徴遊びが多くみられている E 児、F 児、H 児の母親にみられた。また、社会習慣ルールでも生活年齢が高く象徴遊びが多い子どもの母親の方がより高い割合でみられた。命名や擬声語・擬態語とやりとりパターンは、全母親ともほぼ同じくらい発話がみられ、経験・既有知識との関連づけは B 児と E 児の母親に僅かにみられたのみである。感覚・情緒的知識は、25% 以上と多くみられているが、C 児や F 児の母親は割合が低く個人差がみられた。

5. 母親の「料理一食べる」スクリプトの

ロット構成

母親の「料理—食べる」スクリプトのロット構成を Fig. 1 に示した。母親のスクリプトのロットは子どものスクリプトの発達よりも前に提示する(吉水, 1989²³⁾)ことから、前象徴遊び期および象徴遊び確立期の母親は、核スロットと子どもの遊びを言語で補う内的状態スロットがみられ、子どもが象徴遊びの行動やスクリプトを獲得していくにつれ、核スロットより複雑であり、詳細な文脈である細部スロットがみられていくと思われる。D 児、F 児の母親は核スロットのみ、G 児の母親は核スロットと細部スロット、B 児の母親は核スロットと内的状態スロット、A 児、C 児、E 児、H 児の母親は核スロット、細部スロット、内的状態スロットすべてが出現していた。

6. 母親の「料理—食べる」スクリプトの核スロット実行頻度

母親の「料理—食べる」スクリプトの核スロット実行頻度を Table 10 に示した。食べることは、前象徴遊び期の子どもでも日常生活でおこなっており、遊具も現実に近いものであることから、母親は、食べるという子どものうけとりやすい行動やおいしいという確認を行い、より象徴遊びを獲得した子どもに対しては、料理の宣言や料理の中身の確認といった子どもが遊びを展開していくきっかけとなるような項目を実行していると思われる。全母親とも共通に実行されていたのは調理するであった。また、F 児の母親以外は「おいしいね」というのも実行

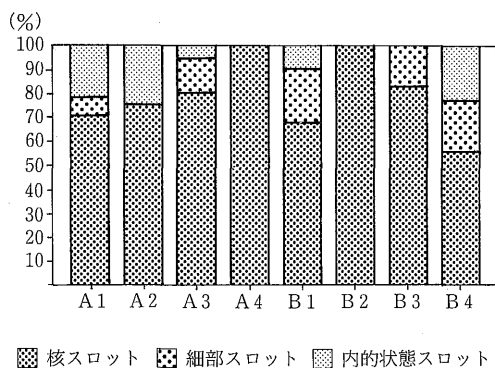


Fig. 1 母親のスクリプトの構成割合

Table 10 母親の核スロット各項目の出現頻度

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
A	3	0	0	6	0	0	0	0	3	5
B	0	0	2	4	2	0	0	0	1	4
C	1	0	0	10	0	0	0	0	1	4
D	0	1	6	7	0	1	0	0	0	6
E	1	0	0	4	0	0	0	1	6	5
F	1	1	0	3	1	1	0	0	0	0
G	0	0	0	6	0	0	0	0	0	4
H	6	0	0	3	0	1	0	1	2	2

していた。①料理開始宣言をする母親はA 児、C 児、E 児、F 児、H 児にみられ、⑧食べるもA 児、B 児、C 児、E 児、H 児の母親にみられた。H 児の母親は、料理開始宣言の頻度が高く、E 児、H 児の母親に食べる人を決定するがみられている。

IV. 考察

母親の発話の機能では、武井ら(1983²¹⁾)の結果と異なり、母親の行動提案が高く、行動要求が低い結果であった。精神遅滞児は言語による具体的な指示が受け取りにくい段階であり、母親が遊びを主導していることから、子どもの行動を具体的に変える行動要求よりも母親がこういう遊びをするということ子どもに言語で示しているのであろう。説明要求や明確化要求では、生活年齢、精神年齢とも低く、遊びのレパトリーの少ない子どもであるA 児やB 児に多く出現していた。A 児、B 児とも遊び行動が母親に明確に伝わりにくく、母親が子どもの行動に意味付けをし、遊びを展開していかなくてはならないためではないと思われる。全員の母親に共通して内的表出が高い割合であった。健常児の母親同様に、精神遅滞児の母親も象徴遊びが未発達の段階の子どもに対して象徴遊びの働きかけ(武井ら, 1993²¹⁾)といわれる内的表出が出現していた。一方、受容・了解は母親に共通して低い割合であったが、これは、精神遅滞児は遊びのレパトリーが少ない、母親に働きかけるような遊びの頻度が少ないことが影響し

ているのであろう。

母親の発話の内容では、C児を除いて生活年齢の高い子どもの母親の方が文化・概念的知識や社会習慣ルールに関する発話を多くおこなっており、全母親とも命名とやりとりパターンに関する発話の割合が多かった。生活年齢が高い子どもは全員象徴遊びがみられている。社会習慣ルールの母親の発話は、物の操作的な遊びよりも象徴遊びのような日常生活を反映した遊びである方が出現するであろう。また、C児のように精神年齢が高く象徴遊びがみられるようになっている場合や、生活年齢が高い場合に単なる物の命名ではなく、遊びの文脈にそった文化・概念的知識や社会習慣ルールを母親は意識して発話しているのであろう。秦野ら(1993⁹⁾)は、12ヶ月の健常児に対して、母親は社会習慣ルールや言語による外界認識の基礎である命名について多くの情報を与えていると報告した。本研究では、生活年齢、精神年齢ともに12ヶ月前後であるA児、B児の場合、社会習慣ルールよりはやりとりパターンの割合が高くなっている。この違いは、秦野ら(1993⁹⁾)との遊具の違いがあげられる。秦野ら(1993⁹⁾)は、カップ、人形など象徴遊びがより出現しやすい現実に近いおもちゃも使用していたが、アクティビティ・センターのような物の操作が出現しやすいおもちゃや積み木やタオルを使用していた。この種のおもちゃでは母親が全く別のものにみだてて遊びをしても12ヶ月の子どもの象徴遊びであると理解し、やりとりが続かないであろう。本研究のおもちゃは、レンジ、鍋、食べ物の模型、お皿、スプーンといった日常生活で乳幼児が体験できる「食べる」「飲む」に関する現実に近いものであった。そのため、母親は前象徴遊び期の子どもの象徴遊びの働きかけをした結果、やりとりパターンが多かったのであろう。

母親の働きかける遊びの行動に関しては、子どもが象徴遊びを行っていないA児、B児の母親でも物の操作的な遊びと共によりレベルの高い統合化した象徴遊びを行っていた。これは、

遊具が象徴遊びのテーマのものであったことと、象徴遊びをおこなっていない子どもでも遊べる可能性のある「食べる」「飲む」ことに関する遊びであったためであろう。また、生活年齢や精神年齢の高い子どもの母親の遊びの働きかけに、より象徴レベルの高い象徴遊びIVがみられなかった。生活年齢が2歳6ヶ月以上の健常児であれば象徴遊びIVがみられる段階であり(Westby, 1991²²⁾)、母親は遊びの主導権を子どもに明け渡していき、子どもに遊びを実行させるため母親の象徴遊びIVのような働きかけがみられなくなる(吉水, 1989²³⁾)。本研究の生活年齢の高い子どもの母親は子どもに遊びの主導権を明け渡すため象徴遊びIVがみられなかったわけではなく、母親の核スロットの実行頻度の結果にも現れているように「材料を切る」や「食べる、飲む」「おいしいねという」といった子どもの精神年齢にあった、子どもが日常生活でおこなっていてわかりやすい遊びの働きかけをおこなったため、象徴遊びIVが出現しなかったと思われる。

母親の子どもに対する象徴遊びの働きかけとしては、本研究の遊具が「料理—食べる」という遊びのテーマに関するものがほとんどであったため、母親全員がこのテーマにそった遊びをおこなった。遊びの内容としては、生活年齢、精神年齢が低い子どもでも「料理—食べる」の核スロットのみではなく、細部スロットや内的状態スロットも母親は行っていた。生活年齢が低い子どもでも遊びのテーマがわかりやすかったことが、より母親の詳細な行動や言語をひきだしたのであろう。その反面、G児の母親のように核スロットしか行っていない母親は、同じ遊び(材料を包丁で切る)を繰り返していた。包丁で材料を切ることは象徴遊びではあるが、遊び自体は発展しなかった。この母親は遊びのテーマを発展させるよりも子どもがおもちゃを上手に操作することに注目していたと思われる。

V. まとめ

本研究の結果、健常児の母親同様、精神遅滞児の母親は前象徴遊び期から象徴遊び期の子どもへも象徴遊び的な働きかけを行っており、母親の提示する象徴遊びは、子どもの象徴遊びのレベルよりも統合化されているものであった。母親の発話の機能では、行動要求よりも行動提案をおこなっており、内的表出も高い割合であったが、子どもの遊びの働きかけやレパトリーが少ない事から受容・了解は低い割合であった。母親の発話の内容では、健常児の母親に多い社会習慣ルールや文化・概念的知識よりも命名ややりとりパターンが高い割合であったが、子どもの象徴遊びがみられてくるにつれて、社会習慣ルールが高くなっていく傾向がみられた。象徴遊びのスロットでは、前象徴遊び期の子どもへも細部スロットを提示しており、精神遅滞児の母親は前象徴遊び期から子どもへより複雑な遊び行動を提示していた。具体的な遊びの行動としては、子どもにわかりやすい食べる、飲む、材料を切る、「おいしいね」の頻度が高かった。しかし、この遊びの提示には母親により個人差がみられた。

本研究では、精神年齢が低く、遊びの場面での言語表出が発声のみの精神遅滞児を対象にした。子どもの遊び行動、すなわち象徴遊びを行っているかどうかや具体的にどのような遊び行動がわかっているかによって母親の働きかけは異なっている傾向にあった。今後は、象徴遊び確立期や象徴遊び発展期にある子どもの母親の働きかけも明らかにしていく必要がある。また、母親にできるだけ同じ遊びのテーマをもってもらうために、より現実に近くテーマの分かりやすいおもちゃをもちいた。今後、より遊びの自由度が高いおもちゃをもちいた場合の母親の遊びの働きかけをも検討していく必要があると思われる。

文献

- 1) Buium, N., Rynders, J., and Turnure, J. (1974) Early maternal linguistic environment of normal and down's syndrome language-learning children. *AJMR*, 79, 59-58.
- 2) Cunningham, C., Reuler, E., Blackwell, J., and Deck, J. (1981) Behavioural and linguistic developments in the interactions of normal and retarded children with their mothers. *Child Development*, 52, 62-70.
- 3) Dore, J. (1978) Conditions for the acquisition of speech acts. In Markova, I. (ed.) *The social context of language*. Wiley.
- 4) Fiese, B. H. (1990) Playful relationships: A contextual analysis of mother-toddler interaction and symbolic play. *Child Development*, 61, 1648-1656.
- 5) 蓮見元子・秦野悦子・栗山容子・星三和子・瀬戸淳子・前川喜平 (1993) 乳幼児の社会化にかかわる母親の方略(3)―象徴性のある働きかけ―. *日本教育心理学会第35回発表論文集*, 111.
- 6) 星三和子・瀬戸淳子・蓮見元子・秦野悦子・栗山容子・前川喜平 (1993) 乳幼児の社会化にかかわる母親の方略(1)―観察の方法と概要―. *日本教育心理学会第35回発表論文集*, 109.
- 7) 細川かおり・池田由紀江 (1988) ダウン症幼児の象徴遊びの発達に関する一考察. *心身障害学研究*, 13(1), 1-7.
- 8) 細川かおり・橋本創一・池田由紀江 (1987) 精神遅滞児の母子遊び場面における相互交渉の分析. *心身障害学研究*, 14(1), 53-60.
- 9) 秦野悦子・栗山容子・星三和子・瀬戸淳子・蓮見元子・前川喜平 (1993) 乳幼児の社会化にかかわる母親の方略(4)―文化・社会的知識に関する情報をどのように与えているか―. *日本教育心理学会第35回発表論文集*, 112.
- 10) Hill, P. M., and MuCune-Nicolich, L. (1981) Pretend play and patterns of cognition in Down's syndrome children. *Child Development*, 52, 611-617.
- 11) 加島(腰川)一恵・池田由紀江 (1994) 精神遅滞児の象徴遊びの発達における一考察. *心身障害学研究*, 18, 99-107.
- 12) Krakow, J. B., and Kopp, C. B. (1982) Sustained engagement in young Down syn-

- drome children. *Topics in Early Childhood Special Education*, 2(2), 32-42.
- 13) Marshall, N. R., Hegrenes, J. R. & Goldstein, S. (1973) Verbal interactions : mothers and their retarded children vs mothers and their non-retarded children. *AJMR*, 77, 415-419.
 - 14) McConkey, R., and Martin, H. (1984) A longitudinal study of mothers' speech to preverbal Down syndrome infants. *First Language*, 5, 41-55.
 - 15) 無藤 隆・外山紀子(1991) 生活・遊び・学習. 無藤隆編, 新・児童心理学講座第11巻—子どもの遊びと生活—. 金子書房, 15-60.
 - 16) Nelson, K., and Gruendel, J. (1981) Generalized Event Representations : Basic Building Blocks of Cognitive Development. In Lamb, M. E. & Brown A. L. (Eds) *Advances in Developmental Psychology*, Vol 1, Hillsdale, NJ : LEA, 131-158.
 - 17) 笹生直江 (1981) 精神遅滞児における象徴的使用の発達. 日本特殊教育学会第19回大会発表論文集, 80-81.
 - 18) Seidman, S., Nelson, K., and Gruendel, J. (1986) : Make Believe Scripts : The Transformation of ERs in Fantasy. *Event Knowledge : Structure and Function in Development*, Lawrence Associates Inc., 161-188.
 - 19) Shimada, S. (1981) Development of symbolic play in late infancy. *RIEEC REPORT*, 17, 1-24.
 - 20) Shimada, S. (1988) Comparison of structured modeling and mother-child play settings on the development of pretend actions in young children with Down's syndrome. *RIEEC REPORT*, 37, 65-71.
 - 21) 武井澄江・萩野美佐子・大浜幾久子・斎藤こずゑ(1984) 言語行動の発達 (VII) 母子相互作用における動作と言語. 東京大学教育学部紀要, 24, 61-80.
 - 22) Westby, C. E. (1991) A Scale for Assessing Children's Pretend Play. In Schaefer, C. E., Gitlin, K. & Sandgrund, A. (Eds) *Play Diagnosis and Assessment*. John Wiley & Sons, 131-161.
 - 23) 吉水ちひろ (1989) 2才児における象徴遊びの発達と言語発達・母子コミュニケーションとの関係について. *教育心理学研究*, 37, 1-10.

An Analysis of Maternal Linguistic and Behavioral Environment of Mentally Retarded Children in Play Setting

Kazue KOSHIKAWA and Yukie IKEDA

The purpose of this study was to analyze maternal linguistic and behavioural environment of mentally retarded children in free play setting. The subjects were 8 pairs of mentally retarded children and mothers. All mentally retarded children were similar to mental age and verbal level. Mothers and mentally retarded children were provided a set of play cooking materials at a playroom. The scenes were video-taped for 5 minutes to analyze. The results showed that mothers gave children information on symbolic play and done symbolic play as well as mothers of children at presymblic level. Maternal play behaviors were higher level than children's one, and maternal play were the same level as children's daily behaviors.

Key Words : mentally retarded children, play, maternal linguistic and behavioural environment